

講演会：『地域は舞台、主役はわたし』

- - さようなら単線型社会・こんにちはリカレント型社会

日時：2004年3月14日 14:00～15:30

主催：杉並区・生活クラブ運動グループ地域協議会

講師：天野正子氏

講師プロフィール

1938年生まれ。千葉大学文学部教授、お茶ノ水女子大学大学院人間文化研究科教授を経て、現在、東京女学館大学国際教養学部教授。

著書：『自立神話を超えて 女たちの性と生』（有信堂高文社、1987年）『「生活者」とはだれか 自律的市民像の系譜』（中公新書、1996年）『フェミニズムのイズムを超えて』（岩波書店、1997年）『老いの近代』（岩波書店、1999年）『団塊世代・新論 <関係的自立>をひらく』（有信堂高文社、2001年）『愛したくなる「家族と暮らし」』（PHPエディターズ・グループ、2003年）他。

司会者

それでは講演会、『地域は舞台、主役はわたし：さようなら、単線型社会・こんにちは、リカレント型社会』に移らせていただきます。

講師の天野正子先生は、千葉大学文学部教授、お茶ノ水女子大学大学院教授を経て、現在、東京女学館大学国際教養学部教授でいらっしゃいます。ご専門は社会学、とくにネットワーク論、新しい社会運動論の研究をされております。私どもの活動については、とくにワーカーズ・コレクティブの運動にご理解とご支援をいただいております。それでは天野先生、よろしくお願い致します。

ワーカーズ・コレクティブとは

誰かに雇われるのではなく、働くもの自身が出資しあい、それぞれが事業主の一人ひとりとして対等に働く共同体をワーカーズ・コレクティブという。

その原点はスペイン・バスク地方にあるモンドラゴン協同組合で、生産協同組合、農協協同組合、消費生活協同組合、人民銀行など、さまざまな協同組合があり、生活の全域をカバーしている。スペイン以外には英国、米国、ドイツ、インド、イタリアなどに定着している。

講演：『地域は舞台・主役はわたし』

さようなら単線型社会・こんにちはリカレント社会

天野正子さん

はじめに、私ごとですが、この杉並に住むようになって早や 25 年たちました。私にとって杉並という土地は、ほんとうに大切な暮らしの空間だったと思います。子どもを育てながら働いてきた私にとって、地域の人びとは命綱でした。危険な遊びをする子どもを、わが子同様に叱ってくれたり、カギを忘れて我が家に入れない子どもを家に呼び入れて下さったり、近所の人々の支えで何とか子育てと働くことを両立できたのだと思います。

今度は私が、ここで年を重ね、やがて、この地で死んでいくのだと思うと、地域という空間が違った色合いをもって現われてきます。地域を単なる通過駅と思うか、ここで老いて死んでいく土地と思うかにより、地域はまったく違って見えるのです。これから約一時間、「わたし」はこの地域を舞台にどんな役を演じることができるかを、みなさんと一緒に考えていきたいと思います。ご自身の日常的な活動を思い起こしながら、肩から力をぬいてリラックスしてお聴きいただければ、と思います。

いま、わたしはどこに立っている？

さて、いま、私たちの立っている時代と場所をはっきりさせておきましょう。これまでも何度か日本社会は転換期だ、変わり目だといわれてきましたが、バブルがはじけたあとの 90 年代から今世紀にかけての日本社会は、それこそ本当の意味で、これまでにない構造転換をせまられているといってもよいでしょう。

新しい世紀になって、ひっぱりだこになっている言葉は「崩壊」という言葉です。いわく「日本的雇用慣行の崩壊」、いわく「中流階級の崩壊」、いわく「学力の崩壊」など。それに呼応するように、私の周りで学生たちがふんだんに消費している言葉は「わかんない」です。卒業しても就職できるかどうか「わかんない」、就職できてカイヤがいつまであるか「わかんない」、カイヤがつづいてもいつまで働くか「わかんない」、など。

では、具体的に私たちはどのような転換期のただなかにいるのでしょうか。大きく四点、あげたいと思います。

ちょっと話はかたくなりますが、一つは、あらゆるところに垣根をつくって棲

み分けする社会から、垣根をはずしていく社会への転換期に立っているということです。高度成長期はあらゆる所で垣根づくりが限りなくすすんだ時代でした。

たとえば生産と消費の場が分れる、それにもなって職場と生活の場が分かれる（いわゆる職住分離です）、今度は家族のなかで夫は賃労働、妻は家事労働というように性別によって役割分担がすすむというように。また、社会全体では労働の場、生活の場、政治の場が相互に切り離されていきます。「分けて一生懸命、一つのことだけをするのが効率的」という神話のもとに垣根づくりがすすんだのです。

それが 90 年代前後から現在にかけて、いたるところで垣根をこわす動きが始まっています。家事や育児を男女が担うという性別による垣根だけではありません。労働の世界をみると、雇用労働と自営業、営利と非営利、正規労働と非正規労働との垣根が低くなり、あいまいになっています。雇用の形も SOHO (small office、home office) など、新しい形が生まれています。

二つ目は、いうまでもなく社会的潮流としての少子高齢化のまっただなかにいるということです。21 世紀は「おばあさんの世紀」です。もちろんおじいさんの世紀でもある。2050 年には、平均寿命は男女ともに一段とのびてなんと、女性 89 歳、男性 81 歳ですね。

少し前まで私たちは 2025 年には四人に一人が高齢者という推計を聞かされて、高齢化のピークはそのへんかと思っていました。とんでもない。2050 年には三人に一人以上が高齢者です。この話をアメリカ人の友達に話すと、「おお、スゴイ！」と大げさに反応されてしまいました。アメリカは日本より早く高齢者比率 7% の高齢化社会に突入したというのに、いまだにその比率は 10% そこそこ（ちなみに日本は 18%）。外国から移民を多数受け入れていることと、「育児をしない男は父とは呼ばない」という常識が根付く社会であることから、先進国のなかでも出生率をもっとも高い。

話はそれますが、高齢社会というのは、家庭と地域以外に所属するところがなくなった人たちがどんどん増えていく社会を意味します。団塊世代が定年退職する 2010 年前後を皮切りに大挙して地域にもどってきます。地域という生活空間がいよいよ重要になってきます。それについてはあとでふれましょう。

三つめは、これもいうまでもありませんが、限りある資源や自然環境をどのように保っていくかの自覚が人々の意識に刻まれはじめています。いま、スロライフ、スロワーク、スロフード、スローツアー、スロラブなんていう言葉

がはやっていますね。かつてスモール・イズ・ビューティフルということばがありました。いま、スロー・イズ・ビューティフルを合言葉に、ともかく急ぎ過ぎない、モノを惜しみなく消費すまい、環境にやさしい生き方、環境に負荷を与えない働き方への要求が地球規模で高まっています。私たちは、まさに環境の世紀を生きています。

四つ目は、これまでの垣根のある社会を支えてきた政治・経済・労働・社会のしくみの制度疲労がすすんでいることです。たとえばパート、派遣労働、NPO、ワーカーズ・コレクティブ、フリーターなどの非正規労働、あるいは非営利の部分が大きくふくらんで、社会的な待遇面で、雇用労働との格差がどんどん広がっています。しかし、そうした現実には、いまの労働法制はほとんど無力です。なぜならいまの労働法はもっぱら雇用労働を対象にしているからです。

時代の動き 逆風か、追い風か

こうした垣根をくずす動き、福祉と環境、地域空間への関心の高まり、そして社会のしくみの制度疲労がすすんでいる「いま」という時代、それは、今日、お集まりくださったグループにとって追い風になるのでしょうか、それとも逆風でしょうか。

もちろん、追い風です。というより、むしろ、こうした社会の動きを先取りするかたちで、市民が自治する地域社会づくりを求めてさまざまな活動をつづけてきたことへの先駆性は大きいと思います。

たとえばワーカーズコレクティブ一つをとっても、職住分離ではなく、地域という暮らしの場での仕事づくりそのものが、垣根をくずす動きでした。また、環境保全にせよ、介護や子育てにせよ、ワーカーズ・コレクティブはこれまで地域という暮らしの舞台を重視してきました。さらには、たとえば食品加工ワーカーズのように、できるかぎり安全な素材を求めて地場産の泥つき野菜を使い、不要な廃棄物をださないような働き方自体、環境の世紀にふさわしい働き方といえるでしょう。

キーワードはリカレント

では、時代の追い風を受けて活動する私たちが求める社会とはどんな社会でしょうか。

話しが飛んで恐縮ですが、私は女も男も、誰もが生涯に少なくとも一度は、NPO

的な働き方やワーカーズ的な働き方を経験することを望ましい、というより必要だと考えています。とくに、できれば若いときに経験してほしいと。

働くことの自分流儀の意味づけ、自主管理の楽しさと厳しさ、モノやサービスを「使う側」にたつての「つくる側」の発想、自分の暮しが人々との相互の依存関係になりたっていることの実感、協同して働くことの意味、さらには自分の生活や働き方が環境内的存在であることへの自覚化など、NPO やワーカーズ的な働き方の経験は、のちにカイシャや役所など雇用労働に就職しても、生かされなければならない貴重な経験だ、と思うからです。つまり、私たちが求める社会とは、たとえば誰もがその生涯にワーカーズ的な働きかたや NPO 的な働き方が選び取れるような、柔軟な社会なのです。

それは、具体的にどんな社会でしょうか。キーワードは「リカレント」です。「リカレント」というのは英語ですが、行ったり戻ったりできる「くりかえし」とか、「循環」とか、あるいは「連続」という意味です。さらには「連続する」、「循環する」ということから、あらゆる意味での二分法（あれか、これか）的な考え方を否定するという意味です。

まず、なによりもリカレント型人生が可能な社会です。これには二つの意味があります。その一つは、私たち一人ひとりが労働と教育、労働と社会活動、労働と家庭生活の間をいったりもどったり柔軟な生き方が可能な社会です。

これまでのように、児童期をすごしたあと、学校中心の教育期を送って、会社で働く労働期を送って、やがて引退して終わりという、単線型人生をノーマルとみなすのはおかしい。児童期は「遊んでばかり」、教育期は「勉強ばかり」、労働期は「働くばかり」、引退期は「あくびばかり」という人生はあまりにも貧しいのではないか。

人生 50 年時代だったら、そうした型にはまった人生はさげがたいものであったかもしれません。しかし、いま、人生は長期化し、社会は物質的には豊かになり、また、たえまない変化にさらされています。一人一人がそれぞれに、もっと自由で後戻りややりなおしが可能な人生が許されてよいのではないか。ちょうど、「人生二度あれば」というシャンソンのように。ちょっと話はそれますが、私は、才能とは、やり直す力だ、と知っているのです。何度でも新たに出発しうる能力です。そのためには、どういう選択をしたかによって、価値の序列や不利益が固定されない社会であることが重要な条件になります。

リカレント型人生の可能な社会のもう一つの意味は、社会全体が「一斉型」の

しくみから解放されることをいいます。日本の社会は、いってみればスキマがない、どの組織にも集団にも所属していない存在というのは許されません。誰もがいっせいに進級し、卒業して、就職する。一つの学校をでたらすぐにどこかの企業に就職しなければならない。それだけではありません。「働く」ことが、そのまま「雇用されること」と同じ意味になっています。卒業したときにすぐにどこかの企業に従業員として就職しておかないと、あとで損をしてしまうという

スキマのある社会を

実は、企業への就職を当然とする考え方も、新規学卒一括採用も、つねにどこかの集団や組織に属することを重視する方式も、はじめたのは古いことではないのです。奇妙に思われるかもしれませんが、戦前期の社会や学校のほうがより開放的だったのです。落第したり、卒業してもすぐに就職しなかったりは、ごく普通のことだったのです。それが失われ始めたのは、私たちの社会や学校が急速に効率的に運営されるようになった高度成長期です。いいかえれば、日本社会が自営業中心からサラリーマン中心へと変わる大きな転換期に、そうした見方が定着したのです。世代的にいえば団塊世代が、学校を卒業したらすぐにサラリーマンになることを、当然と考えるようになった最初の世代といわれます。

企業にしる、学校にしる、組織を効率的に運営するためには、重要なのは「例外」や「はずれ」をできるかぎり排除すること、一斉型にすることです。フリーターになって自分探しをしたり、職人的な仕事にトライしたり、自分にとって意味のある仕事をたちあげたり、そうした新しいことに挑戦しようと思ったら、個人的に高いリスク（危険）を覚悟しなければならない。私たちの社会は効率的な運営に見事に成功したことによって、自由のある部分を、夢やロマンを、チャレンジ精神を失ってしまったのです。

ということで、誰もがもっとしなやかな生き方、働き方が可能になるためには、一斉型の社会のあり方や、スキマのない社会のあり方、雇用労働だけを労働とみなす狭い考え方に終止符を打ち、教育と労働の間をもっと自由に行き来できるようにしなければがならない。けれども、日本の場合、それが大変むずかしいのです。

問題は労働と教育、企業と大学との垣根が高すぎました。垣根くずしが進んでいるといっても、この二つの間のかきねは低くなっていません。いったん就職すると、もう一度学び直したいと思ったら退職しなければならない。戻ってきて

も働く場が用意されているわけではありません。それに学びたいと思っても学費やその間の生活費をどうするか、という頭の痛い問題があります。

スウェーデンの実験に学ぶ

ここでちょっと専門的になりますが、その点でいえば、高度福祉国家として知られるスウェーデンが教育面でもすすんだ実験をしています。そのスウェーデンの実験で注目をあびたのは（70年代末の）大学入学制度の改革です。年齢25歳以上で4年以上の労働経験をもつ大人に大学を解放したのです。「25・4」改革とよびます。労働経験と学校教育経験が、ほぼ対等に評価されるようになったのです。この労働経験とは必ずしも雇用労働だけとかぎりません。おもしろいのは、この実験が始まると、たちまち大学進学率が低下しはじめたという事実です。大学にいつでも入学できるのだったら、なにも高校卒業と同時に進学する必要はないわけです。それとも、誰でも進学できる大学教育なんて、魅力がなくなったのでしょうか。この改革とともに、ボランティア活動への参加や仕事起こしなど、若者たちのいろんな挑戦が始まったといわれます。

といって仕事についている人たちに、「自分のお金でやりなさい」といっても、仕事をやめてまで、学校に戻ることは誰にでもできることではありません。それをたやすくするために、企業・労働組合・政府が基金を出し合って、その間の給料を保証するという「教育有給休暇制度」が導入されていきます。この制度はスウェーデンだけでなく、ベルギー、イタリア、ドイツなどでも導入されています。実は、74年のILO総会（国際労働機関）で、教育有給休暇制度に関する条約と勧告が出されるのですが、残念ながら日本は批准していません。日本には企業内教育という発想があっても、人が、新たにやりなおすために学ぶ権利があるという発想はありません。

このように労働と教育の間を行き来する自由、いいかえれば柔軟な生き方が可能な社会とは、まずなによりも、自営業であれ、雇用労働以外の働き方であれ、一つの労働キャリアとしてきちんと認めること、また、人生のどんな段階であれ、学びたい人に学習する権利とともに、教育休暇と学費・生活費を保証するしくみが必要であることがわかります。このようなしくみがつくられれば、どんどんふえているフリーターの問題も解決するめどがつくのですが。

「地域」ひらく福祉循環型社会

リカレント（循環）は、私たちの人生上だけではありません。地域を舞台に展開される福祉循環型社会のしくみづくりも私たちが求めるものです。

ここでいう福祉循環型社会というのは、親子の関係や世代をこえて、生命と生活の連続性が実感される社会のことをいいます。もっと具体的にいえば、子育ても高齢者のケアも、血縁をこえ、世代をこえて、みんなが支えあうことを常識とする社会です。

都市のなかで、お年寄りを抱えるカゾクが経験する困難は、介護力や介護の知識不足だけでなく、老いた親と子の感情的な関係が、カゾクの内部に閉鎖的に囲い込まれることです。感情の出口がない。親族だけでなく、他人のかかわりのある方がお年寄りの自立を引き出すという調査結果もあります。囲い込まれた状況から解放されるためには、一方でカゾクを地域へ開いていくこと、もう一方でカゾクをサポートするしくみづくりが必要となります。

今日、参加の皆さん方一人ひとり、そのしくみづくりの一端を担っておられる。一人ひとり、自分のもっている知恵と技術を出し合い、市民の資本を集めて、自分たちのコントロールのもとに、住んでいる人たちに必要なモノとサービスを提供していく活動をされている。そこにあるのは、まさに競争ではなく、協働です。

おもしろいのは、いま、地域で介護のサポートづくりをされている年齢層をみますと、40代、50代が多いですね。老いるには、まだ間がある。けれども老いについて実感をもちはじめている人たちです。つまり、先取りしてチャレンジする余力がある世代です。自分が年寄りになったとき、おそらく自分がほしくなるような生活用具をつくっておきたい。大切なのは、それが人のためでなく自分のため、自分の老後の安住地づくりのためにやっているということだと思います。

もう一つ、私たちはどのような人と人との関係を求めているかということです。一口にいうと、ヤマアラシ的人間関係です。ある冬の寒い夜、ヤマアラシのカップルがお互いの体温であたためあおうとする。けれども、ヤマアラシにはとがったとげがある。ついたり離れたり、試行錯誤をくりかえすうちに、適度に暖かく、互いのとげでつきさすことのない、適度な距離を発見したというエピソードです。

このエピソードは、ショウペンハウエルという哲学者の書いたお話の中に出きます。自分の肉体の一部であるとげは、重要な意味をもっています。「自分自身」であることの証しです。このとげをぬいて相手に一体化することはできない。「自分自身」でなくなる。とげをもったまま、相手と手をむすびあえる関係をどうつくっていくかです。はやりの言葉でいえば「自立と共生」です。あるいは「も

たれあい」ではなく、「支えあい」です。足腰のたつ間は、お互いがよりかかる「もたれあい」ではなく、自分の足でたちましよう。でも、足腰がなえるようになったら「どうか、よろしくね」と支えあうことです。自立への道を安心して歩めるのも、その背中合わせにいざとなったら助け合うという常識があるからです。じゃあ、何もできなくなったお年寄りや、自分ではなにもできない障害者や幼い子どもは「依存」ばかりで「自立」はできないのでは?と思われるのでしょうか。そうではありません。その場合の「依存」は、「自立」するための「依存」であり、そのための支えあいなのだと思います。

地域ってどんな空間か?

では、ささえあう関係をつくる地域という舞台は、どんな舞台でしょうか。いや、その前に、なぜ、地域が重要になってきたのでしょうか。

それは、一つには、「会社」と「家族」という、戦後の日本社会で中心的な役割を担ってきた二つのコミュニティが力を失ってきているからです。終身雇用制が大きくゆらぎ、非正規の雇用がふえていくなかで、いまの社会保険は、存続の危機とむきあっています。かって「ゆりかごから墓場まで」従業員の生活を保障してきた「カイシャが社会」という姿はどこかに消えてしまいました。

一方、小さく無力になった家族は、女性の社会参加や家族秩序のゆらぎとあいまって、個人はむきだしのかたちでほうりだされる方向にあります。

選手交替というのでしょうか。カイシャと家族という二つの「失われたコミュニティ」に代わって重視されてくるのが、地域というもう一つのコミュニティです。環境保全にしても、介護や子育てにしても、地域というコミュニティが大きな意味を担っていることは、すでに見た通りです。

第二に、地域は、買う、食べる、排泄する、育てる、働く、つきあう、学ぶ、遊ぶ、老いる、死を迎えるという、人々が生きていくうえで何が重要なのかという具体的な問題がもっとも鮮明にみえる空間です。それは、おそらく地域という舞台には、年齢もさまざまなら、経験も稼ぐ力も体力もさまざまな人びとがいる、つまり、異質な人々による集団だからでしょう。健康な壮年期の男性中心のカイシャや、同年齢の子どもたちが集まっている学校のなかでは決してみえてこないものが、地域からはみえてくるのですね。

では、地域でわたしたちができることは何か。もう、すでに実際に活動されているみなさんには釈迦に説法だ、とは思いますが、日ごろ、考えていることをお

話しましょう。

いま、子どもをめぐる問題がいっぱい起こっていますね。虐待、性犯罪、暴力、誘拐など、社会の矛盾、いや、むしろ大人のもっている問題が、いちばん弱い立場の子どもに集中して起こっているといえます。子どもの受難の時代といってよいでしょう。子どもをどう「育てるか」という攻めの姿勢より、どう「守るか」という守りの姿勢が重要になっているのは、なんともやりきれないですね。

ナナメの関係のすすめ

あえて、攻めの方向で考えるなら、子どもにとって何が重要か、ときかれれば、やっぱり豊かな人間関係をどうしたら子どもたちにつくってやれるかだ、と思います。子どもは人と人との関係を通じていろいろなことを学んで大人になっていく。この基本は、社会がどんなに変わっても変わらない。

ところが、ご存知のようにカゾクのなかでの人間関係はやせ細る一方です。家庭のなかにはおじいちゃん、おばあちゃんもいないし、兄弟も少ない。やさしさや思いやりというのは、年下の兄弟や老いた祖父母との日常的なかかわりあいから育てられるものです。一方、学校では同年齢の子どもばかり。子どもにとってもっとも重要なのは、タテ（父母や祖父母）でもヨコ（兄弟や仲間）でもない、ナナメの関係です。つまり、ちょっと年上のおにいさん、おねえさんや、おじさん、おばさんなどです。子どもたちにとって一番、相談しやすいのは、ナナメの関係にいる人々です。

こういう人たちは、ときには悪知恵も教えるけれど、いいことも教えて教えてくれる。そういう人たちが、子どもがおとなになっていくのを手助けしていた。いまは、そういう人たちもいなくなってしまった。となると、何をする必要があるのかといえば、子どもたちにナナメの関係をもう一度、いわば意図的につくってやれるか、という問題です。つまり、血縁ではない、社会的な兄弟、社会的なおじさん、おばさんを子どもたちのためにつくりだしてやる必要がある。ソーシャルブラザー、ソーシャルシスター、ソーシャルアンクル、ソーシャルアントですね。各地におやじの会とか兄貴・姉貴の会ができていますが、もっとしっかり定着してほしいと思います。

「カイシャ人間」から「チイキ人間」へ

では、人生のパートナーとしての男性にどうなってほしいか。それは、いうま

でもなく「カイシャ人間」から「チイキ人間」への道をしっかり歩んでほしい。かつて「育児をしない男を父とは呼ばない」「介護をしない男をひとと呼ばない」という名文句がありましたが、名文句として終わらせないで、その実質をつくっていくことです。最初にちょっとふれましたが、2010年を基準に、ベビーブーマー世代がどーっと地域にもどってきます。

日本の高度成長と、それにつづくバブル時代を支えたこの世代は、かつて国鉄のコマーシャルにあったように、「ディスカバージャパン」「ディスカバーワールド」はなさっても、「ディスカバーご近所」はいっさいしておりません。地域はもっぱら「通過駅」でした。この世代が地域に軟着陸できるように、いろんな形で受け皿をつくりたいですね。その人たちのなかから社会的おじいさんが登場してくれたらどんないいでしょう。というより、かなり前から、各地でベビーブーマー世代によるいろんな取り組みがはじまり、根付いています。日本の男性たちもまんざら捨てたものではないな、と思います。たとえば神奈川県で月に2度のペースで、これまで女性が担ってきた地域のお年寄りや障害者のケアを自らの問題としてとりくんでいるある男性がこう語ってくれました。「支えなしには生活できない人を目の前にすると、何とかしたいと思いやる。私にも人間らしい感情が残されている。捨てたもんじゃないな、と正直なところほっとする。支えてあげる人がいることが、自分を支えていることを痛感した」。経験からうまれた、いいことばですね。60歳で定年をむかえてもあと20年近い長い長い人生があります。そのとき、男性はどこに居場所を見出すのでしょうか。男性を地域の舞台にひきもどしていくうえで大きな影響力をもっているのは、女性たちです。「肩書きも名詞もなくなったら、あなたはどうするの、自分固有の顔をもっているの?」という女性の側からの働きかけが、効果があるようです。

地域の脱ジェンダー化

では、私を含めて、女性たちには何が求められているか。むずかしい言葉でいえば、地域社会の脱ジェンダー化です。地域のどこをみても、ものごとを決める場所に女性の姿があまりにも少ない。今なお、男はアタマ、女はテアシという状況があります。地域活動を平日の昼間、せっせとやるのは女性でも、なぜか、会長や代表となると男性がなっています。もちろん、私は頭になることだけが大切とはおもいません。住民の暮らしにいま、何が必要なのかは、テアシとなって住民のなかに入っていかなければわかりません。けれども住民の肉声、生身の声をきき

とって、それを政策に反映していく場に女性がいなかったら住民の声を政策や行政に生かすことはできません。女も男もテアシになったり、アタマになったり、往復運動することが大切ですが、今はなによりも地域のあらゆるところに一人でも多くの女性を送り出すことが重要な時代であり、杉並生活者ネットへの期待は大きいと思います。

同時に、ただ、女性を送り出すだけではない。女性の数をふやすことは第一段階としては重要です。けれども女性の数をそろえても、その人がごく普通にくらしている人々の視点をどれだけもっているか、政策決定の場できちんと発言していく力、わたりあう力、地域を変えていくだけの政策提言の力量をもった人かどうか、同じ志をもつひとたちとネットワークがつかれる人かどうかが問われます。量から質への時代なんです。そのような力をもった女性がふえるということは、これまでどちらかといえば男性中心の効率や生産性重視の価値観をかえていく原動力になるということです。そうした効率という価値から、一人一人が、その人自身として尊重され、共に生きることを認め合う価値、支えあうという価値へと移っていく可能性が広がるということです。

バサバサ型からサラサラフカフカ型へ

いま、地域の間人間関係をみますと、一口でいえば、血の通わない「バサバサ型」人間関係といってよいでしょう。通学路で無抵抗な子どもたちがねらわれているなど。近所でこどもが危ない遊びをしていても、わが子でなければ見て見ぬふりをする。地域に一人暮らしをするお年寄りがふえています。地域の人々のまなざしはけっして暖かいものとはいえない。もちろん、隣近所の人々が全く無関心だということではありません。それは、お年寄りの身を案じるというよりも、火事が起こったら、事故を起こしたら大変だという、わが身にふりかかってくる迷惑を考えての関心であることが多いのです。この血の通わない「バサバサ」型の人間関係に問題があるといっても、かつてのようなむら共同体の人間関係がよいわけではありません。

そう、個人の自由を認めない、「ベタベタ」とした、相互監視型のコミュニティではありません。といって都市社会にありがちの「バサバサ」とした血の通わないコミュニティでもありません。個人の自由や選択を重視しながら、いざというとき「助け合う」ことを常識とする「サラサラフカフカ」型のコミュニティです。生活クラブの言葉を借りれば、「公」でも「私」でもない、そこに住むもの

にとって暮しの共通の基盤をつくっていく場という意味で、「共」的な生活空間
とってよいでしょう。

地域は、買う、食べる、排泄する、育てる、働く、つきあう、学ぶ、遊ぶ、老
いる、死を迎えるという、人々が生きていくうえで何が重要なのかという使用価
値がもっとも鮮明に見える空間です。そこに、子育ても介護も、親子、世代内と
いう閉じた関係をこえた、世代間循環性を実現していく試みは、すでにワーカー
ズ・コレクティブが経験していることであり、その意味で福祉循環型社会を先取
りしていることは確かだと思います。さらにいえば、ワーカーズ・コレクティブ
は、その地域に市民の資本を集めて、自らのコントロールのもとで、住んでいる
人たちに必要なモノとサービスを提供していく活動です。その活動が、「規格化」
され、使い勝手の悪い行政サービスや、利潤追及型の民間サービスとはひと味違
う「もう一つ」のサービスを提供することによって、これらのサービスのゆがみ
をただしていく力量をどこまでつけることができるか。これからの課題といえる
でしょう。

その地域は、もちろんかつての地域共同体ではありません。そう、個人の自由を
認めない、「ベタベタ」とした、相互監視型のコミュニティではありません。と
いて都市社会にありがちの「バサバサ」とした血の通わないコミュニティでも
ありません。個人の自由や選択を重視しながら、いざというとき「助け合う」こ
とを常識とする「サラサラフカフカ」型のコミュニティです。生活クラブの言葉
を借りれば、「公」でも「私」でもない、そこに住むものにとって暮しの共通の
基盤をつくっていく場という意味で、「共」的な生活空間とってよいでしょう。

地域をかえていく活動は、もちろん、ひとりではできない。それと同じように
一つのグループ、一つの団体の力にも限界がある。こんな地域で子どもを育て、
つきあいを楽しみ、やがて老いて死んでいきたい、という同じ願望や志をもった
個人やグループの力を結集させることが必要となってきます。情報を集め、交換
しあい、行政に対する代案や対案を作る能力を身につけていく。そして行政との
対等なパートナーシップを育て、わたりあっていくための、「杉並未来ネット」
とも呼べる、地域ネットワークです。ネットワークというのは、わたしを支え、
地域を変え、未来をつくるのです。

今日の私のささやかな報告が何らかのお役にたつことを切に祈っております。
私自身、杉並に住む一人の住民として、新しい気持ちで一步踏み出せるような気
持ちがいたします。ありがとうございました。

司会者

先生、どうもありがとうございました。今の社会これからの社会のことを分かりやすく整理していただいたと思います。

私達がこれからどのように地域で生きていけばよいかという提言もしていただいたと思います。

それでは次に今、杉並区政におきましても、ただいま天野先生からお話をされたような社会状況に対して、「人・まち・夢プラン」という施策を進められています。この紹介を杉並区区民生活部副参事NPO担当の末久秀子さんにお忙しい中お越しいただいておりますので、お話をよろしく願いいたします。

末久さん

NPO担当副参事ということでご紹介いただきましたが、昨年10月に組織改編がありまして、地域人材NPO担当課長という新しいポストで仕事をしております。

今、天野先生のお話を伺ってまさしくこの「地域は舞台、主役はわたし」というテーマで杉並区としましては、この仕組みをどうつくるのかということで、新しく組織ができたところです。

杉並を舞台にしながら、杉並が本当に住みやすいまちになるために地域の中でいろんな方に活動していただき、同時に行政も一緒に同じテーブルに着きながら、対等な形で各分野に取り組みができる仕組みということで、今私どもの方ではいろいろ取り組んでいます。

一つには、『杉並区NPO・ボランティア活動及び協働の推進に関する条例』を平成14年4月から施行いたしまして、杉並区といたしましては地域活動をしやすい基盤作りということを進めてまいりました。

一つには、この4階に杉並NPO・ボランティア活動推進センターが平成14年10月にオープンいたしました。

もう一つは、NPOの活動資金を確保するために市民活動を市民が支える仕組みということで、『杉並区のNPO支援基金』という制度を作りまして、こちらの方も今約580万円ものご寄付をいただいて、そのうちの360万円ほどを15団体に助成ということで今少しずつ基盤づくりができていくところです。

今日は資料として配布していただきました「人・まち・夢プラン」ということで、こちらの方は、まさしく地域を舞台に活動していただくためのプランです。

団塊の世代の方たちが4年後には地域に戻ってらっしゃる時に、たぶん杉並では、約2万5千人くらいの団塊の世代の方がいらっしゃると思うのですけれども、その方達にぜひ60歳のまだ若々しい方々の24時間の内そのうち何時間でも地域に目を向けていただきながら、地域でいろいろな活動をしていただきたいという思いでプランを作成いたしました。

このプランは、NPOに関係する方達のご意見をお聞きしながら、行政がまとめて杉並区としては提案いたします、というような形のプランになっております。

この後このプランに本当に実のある命を吹き込むためには、区内でいろいろな活動をして下さっている人たちの意見をどんどんお寄せいただき、この仕組み作りにも参加していただきながら、このプランが実現できていたら素晴らしいものになるのかなあと考えているところです。

この「人・まち・夢プラン」につきましては後で読んでいただきたいと思うのですけれども、3ページのところに全部思いを込めて入れてあります。

地域活動に参加していただく仕組み作りといたしまして、二つの柱を掲げています。

一つには、「仮称杉並地域参加情報サイト」ということで、地域に参加していただくために情報サイトにアクセスしていただければ、いろいろな地域の活動が見え、かつここにいろいろな方々から情報発信していただく。それとこれから何か始めたいと思う方もここで、「この指とまれ」というようなサイトの中で、ぜひこんな活動をしたいたけれど一緒にしませんか、ということを入れ込んでいただくというイメージで作っています。

もう一つは、これもまだ仮称なんですけれども、呼びやすい名前を募集するような形になると思うのですが、「杉並人づくり大学」ということで、何かの活動するきっかけ作りにここに講座等を設けまして、この講座を受講なさった方が実際に地域活動をされていくという仕組みになったらいいなあとということで、この二つを大きな柱に考えているところです。

地域参加情報サイトにつきましては、懇談会を設けておりまして、この3月に懇談会の報告書が出来ることになっています。こういうサイトというか、ITになると、ただ単に情報を検索するだけならば、別に杉並区がこういったものを作らなくてもいろいろな民間のところから情報を検索できるのですが、なぜ仕組みとして、杉並がこういう地域参加情報サイトを作るかということ、このサイトを使ってぜひコミュニティーを活性化したいというところが、杉並の大きな売りという

ことを考えていて、懇談会の中でもこういった答申が出ることになっています。

この地域参加情報サイトと杉並人づくり大学は平成18年の本格稼働に向けて平成16年度から具体的な内容を詰めていくところです。情報サイトにしても人づくり大学にしても区が主導するというよりは区民の皆さんに是非参加していただきながら、一緒に創り上げていきたいと思っていますところです。皆さんもぜひ読んでいただきながらご意見をお寄せいただいで、これからこういう活動をしますので、何かこんなことが私にもできるということがありましたら、ぜひお声を寄せいただきたいなあと考えているところです。

平成16年度は今、議会のほうでも予算審議をしているところですが、『NPO等からの政策提案制度』という事業を設けまして、事業費総額上限500万円ですが、NPOの方に政策提案をしていただきまして、それを実際に事業にしていくという形も考えているところです。ぜひ皆さんのいろんな積極的な提案等を期待していますので、どうぞよろしく願いいたします。

司会者

ありがとうございました。天野先生のお話にもありましたようにこれから地域で様々な事業や活動が展開されていく時代となりました。これから地域で私達が主役になっている様々な活動や市民事業をしていく時代になるということのお話があり、また区としてもこういったことを支援し、行政との協働のスタイルをつくっていくとのお話でした。